



トロント大学留学記 ～ 留学1年目の出来事から ～

武田 建

1956年6月、武田先生は神戸港から貨物船日川丸（日本郵船の客船「氷川丸」と同じ発音）に乗り、ロサンゼルス近郊のロングビーチに向け出航しました。トロント大学での授業開始前に、ピッツバーグYMCAの少年キャンプで2カ月間リーダーの経験を積み、さらにクリーブランドで貧困家庭の子どものキャンプを見学しました。準備万端(?)、いよいよトロントでの留學生活が始まります。(学院史編纂室)

◆メイドのいる寮

昨夜は、暗くなってからトロント・ユニオンステーションに着いた。カナダ合同教会の本部の方だろう、駅まで迎えに来て下さった。今考えると、夜に着けば、相手の方は仕事が終わっても、出迎えのため職場に残らなくてはならない。寮の管理人も、遅くまで居残りをして下さった。そんなことへの配慮に欠けていて、いろいろご迷惑をお掛けした。これは大きな反省点だ。

私が入ったのは、トロント大学の一角にある、カナダ合同教会が設立したリベラルアーツ・カレッジのヴィクトリア・カレッジと合同教会設立の神学大学院イ(ン)マヌエル(Emmanuel)・カレッジの寮である。この神学校の名をカナダの人は「イマヌエル」と言う。「イ」の後ろの「ン」は発音しない。理由は分からないが、とにかく私にはそう聞こえるのであった。この寮に何人の学生が住んでいるのか、定かではない。それは、大学や寮が秘密にしているからではなく、この原稿を書き始めるまで、私が寮生の数など考えたこともなかっただけの話だ。

寮の目の前にヴィクトリア・カレッジの校舎が建っている。いつ頃建てられたか知らないが、中世のお城を思わせる厳めしい作りである。尖った飾りの付いた屋根に、城壁のような壁、黒く塗られた窓の縁などがそれを象徴している。私は実物を見たことがないのだが、大昔のヨーロッパ建築の中には、こんな様式が幅を利かせていた時代もあったのだろう。

旅の疲れか、キャンプ疲れか、はたまた汽車の旅での緊張のためか、翌朝は寝坊をしてしまった。ドアをコンコンとノックする音がした。驚いてドアをあけると、年配の女性が「メイドです」と言って、掃除道具を持って立っている。びっくりしている私に「毎朝、掃除に来ますから」といって、部屋のフロアをモップのようなもので拭き始めた。慌ててベッドのシーツや毛布を整えようとする、「それも私の仕事だから触らないで」と^{のたま}う。当時、アメリカに比べると、カナダの大学進学率はかなり低かった。それにしても、大学生のこの「貴族扱い」はなんだ？

◆学校が始まる

いよいよ学校が始まった。私が通うトロント大学社会福祉大学院に行くには、ヴィクトリア・カレッジの男子寮の筋向いにある女子寮の横を歩いてヤング・ストリートという大通りに出て、次の角を左に曲がる。すると最初の建物だ。歩いてわずか5分。校舎の向こう隣りには、約1万人を収容できる、大学所有の小さなスタジアムがある。当時、大学もプロも、トロントのカナディアン・フットボールの試合はすべてここでやっていた。その年の冬に行われたカナダのプロ王座決定戦であるグレー・カップも、こんな小さなスタジアムでやっていたのだ。そのときは、クラスメートと一緒に、校舎の最上階の教室から試合を「無料で」盗み見したことを思い出す。ガードマンのおじさんもいっしょだったから、捕まることはない。ご心配なく。ここの校舎の学生である特権を最大限に生かしたチャンスだった！

カナダやアメリカの大学では、卒業式はとて華やかだし、盛大だ。また、その前後には様々な行事がある。しかし、入学式というものはほとんど行われぬ。そんなことを知らない私は、ちゃんとスーツを着てネクタイを結び登校した。どんなクラスメートがいるか興味があるが、そんなことよりこれから一体私はどうなるのかの方がよほど心配だ。

社会福祉専攻修士課程の大学院1年生はざっと80名。そのうち私が専攻するグループワークはたった

10名で、残りはみんなケースワーク専攻である。そちらは仕事の数もずっと多いし、給料もやや高い。聴講生である韓国のYWCAの先生を除くと、80名中、留学生は私一人である。でも、さすが名門校、東は大西洋、西は太平洋沿岸と、国の両端からも学生が集まってきている。

オリエンテーションということで、4階の大教室で研究科長のチャック・ヘンドリー先生のお話を聞く。先生は北米のグループワークの先駆者的存在で、YMCAなどが目ざす教育キャンプの大御所である。神戸YMCAのキャンプ長、今井鎮雄先生からお借りして、ヘンドリー先生が書いた教育キャンプの本を読んだことがある。読むのはこちらのペースでいいが、話すのは先生のペースだ。それについてゆくのは絶望的だ。先生の話の中で分かったのは、「ようこそ、トロント大学社会福祉大学院へ」くらいであった。半分はあきらめの境地で努力したが、疲労だけが残った。

引き続き、授業のオリエンテーションとなった。これは、時間割のプリントがあるし、そのほかの重要事項は書類になって渡されるので、少々聞きとれなくても、なんとか話の輪郭はつかめる。全体のオリエンテーションが終わると、グループワーク専攻の10名だけが別室に集められ、さらに丁寧な説明と自己紹介が始まった。周囲が何を話しているか分からなくても、自分の名前と「ジャパンから」くらいは言える。

◆ややこしい組織の大学

カナダの公用語は英語とフランス語である。公の刊行物は、必ず左右対象に英語とフランス語で書かれている。ただ、トロント市もトロント大学も、通用するのは英語である。いや、カナダ全体のほとんどは英語圏で、フランス語が主として使われるのはケベック州だけだ。そもそも、トロントがあるオンタリオ州は、英国の影響が強い。この州にはロンドンという町があって、テムズ川が流れている。トロント大学は、英国のオックスフォード大学やケンブリッジ大学のように、ヴィクトリア、トリニティー、セント・マイケルと、独自の名と組織をもつ10個ほどのカレッジから成り立っている。その多くはキリスト教の教派とその教会によって創設されているようだ。こうしたカレッジは、基本的にはリベラルアーツと呼ばれる教養学部のようなものであり、そこで4年間勉強しながら、工学を専攻したければ工学部へ行って単位を取るわけである。工学部には、学部レベルの授業も大学院レベルの授業もある。もちろん、大学院の中には専攻別に独立しているものも少なくない。こうした種々様々なカレッジ、専攻、大学院、それに研究所と病院などの総称がトロント大学である。まことにとってややこしい。

◆食事と洗濯

トロント大学の各寮は、それぞれにダイニングルームを持っていた。私の住む寮のダイニングルームはバーウォッシュ・ホールと言って、チャールズ通りから寮にはいる入口にあるオフィスのすぐ前にあった。バーウォッシュとは、おそらくカナダ合同教会の偉い牧師さんか神学者のお名前ではないだろうか。その昔、関西学院が神戸の原田の森にあった頃の写真に、全学生がバーウォッシュ先生というトロントからのお客様と一緒に写したのがある【写真下:原田の森、1913年】。残念なことに、留学中、この写真を見る機会はなかった。その写真と出会ったのは、なんと、この原稿を書き始めてからのことである。まことに残念！

当時の北米の大学寮では、必ずと言っていいほど、夕食時、男子学生はジャケットとネクタイの着用が義務づけられていた。中には、夕食時はもちろん、教室でも黒いガウンを着ることが義務づけられているカレッジもあった。全てのカレッジのダイニングルームを覗いたわけではないが、どこの寮も同じようなもので、重厚なつくりになっている



たことだろう。立派な厚い床に分厚い木のテーブル、このテーブルを動かせと言われても、力のない私ではびくともしない風格と威厳を兼ね備えている。そして、大きく重い椅子がテーブルの前に並んでいる。この重たい椅子は、気合を入れて「どっこいしょ」と言って動かさないと動いてくれない代物しろものである。私は神学生ではないが、カナダ合同教会の奨学金を戴いているので、神学生と同じように扱って貰っていた。神学校は大学院だから、食堂の一番上座のテーブルに着席する。そのさらに先には、一段高いプラットフォームがあった。

その高い所には、大学関係の偉そうな方々が客として、毎晩ではないが招かれる。我々下々の者は「どなたが来ておられるのか」わからないが、寮生に食事マナーを意識させる効果はあったようだ。時には、グストの話を聴く機会もあったが、学生は授業の合間に食事をするので、最後まで聴けないからだろうか、そのような回数は非常に少ないと私は感じた。

朝食時には、ウェイトレスの制服を着た年配の女性が、学生一人一人に「目玉焼きはどう焼くの？ 下だけ焼く？ それとも両面？」、ゆで卵ならば、「ゆで具合は？ 半熟？ 固ゆで？ それともスクランブルエッグにする？」と、好みを聞いてくれる。学生たちも彼女たちの名前を覚えていて、「メリー、スクランブルをお願いします」と、名前を呼んで頼んでいる。そうだ、この国では相手の名を覚え、相手の名を呼んで話しかけたり、頼んだりすることが大切なのだった！ 美容院に行って髪を綺麗にできたら、「その髪型、とってもよくお似合い」と誉めている。今から60年も前の日本男子の口からは、なかなか出てこない言葉である。しかし、毎日こうした雰囲気の中で暮らしていると、多少の努力で「きれいな髪型！」、「その髪大好き！」くらいは言えるようになってくるから不思議である。

ここの食事は、大学寮のものとしては決して悪くなかったことを書き記しておきたい。

しばらくすると、寮に洗濯機がないことに気が付いた。洗濯はどこですのかとメイドに尋ねると、食堂の向かいのオフィスに行けと言う。言われた通り下着を持ってゆくと、係が「それだけか？」と怪訝そうな顔をする。「イエス」と答えると、小さな紙切れに洗濯に出すものを書くよう言われる。どうやら、洗濯屋に出すらしい。ホテルでもあるまいし、大層なことだ。でも、こんなところで文句を言っても仕方がない。道理で、この国の学生は下着を沢山持っているはずだ。昔の日本のように、毎日下着を手洗いするといった習慣など、この国ではとっくの昔に無くなっていたのである。

◆「持つべきものは友」

宿題も大変、読書も大変、レポートも大変だ。しかし、一番困るのは、講義がまるっきり解らないことだ。当時を振り返ると、英語の進歩は、読む、書く、話す、聞くという順番でほんの少しずつ上達してゆくように思う。話すのも大変だが、これは自分の考えを言うのだから、時間をかけて頭のなかで構文すれば何とか表現できる。しかし、聞くのはとっても難しい。相手はこちらの都合などを考えず、頭の中にあるものを自分のペースで話すのであるから、たまったものではない。

社会福祉の学生は温かい心の持ち主だ。講義が分からず、ノートも取れないで困っている私を見た同級生は、自分たちが受けている科目を分担して、ノートのコピーを作ってくれた。60年前のことだ。どこを探してもコピー機などあるはずがない。自分がノートをとるときに、紙の下にカーボン・ペーパーを入れ、コピーを作ってくれたのである。なんと、涙が出る話ではないか。「持つべきものは友」とはこのことだ。だが、カナダ人の手書きの文章を読むのも決して楽なものではない…。手書きのノートは実に読みにくい。でも、クラスメートの友情に感謝！

◆「子の心、親知らず」のダンスパーティー

今でもカナダの大学寮で、年に一回ダンスがあるのだろうか？ そんなものはとっくの昔に寮の行事から外されていると思う。しかし、1950年代のカナダの大学寮ではダンスパーティーなるものが開かれていた。念のために、もう一度紹介するが、私の寮はカナダ合同教会の神学大学院男子寮である。私の感覚では、大学院生がダンスパーティーなどやることなんか考えられない。寮のダンスは、あくまで学部生どまりであるべきだ。院生になったら、入学したその日から、卒業の前日まで勉強に追われるのが宿命だ。これが私の言い分だ。



しかし、この寮に住む神学専攻の大学院生には彼らの言い分がある。学部時代からのガールフレンドを郷里に残し、トロントに出てきて3年間。ひたすら神学の勉強に励み、秋には牧師として教会に赴任する。その前に、自分がどんな所に住み、どんな仲間と暮らしてきたかをガールフレンドに見せたいと思う気持ちは分からないでもない。もう一つの理由は、私たちの寮があるチャールズ・ストリートを少しいったところに、同じカナダ合同教会が開いている女子のキリスト教教育指導者養成のための学校と寮があった。男子独身神学生のデートのお相手は、もっぱらこの寮に住む女子キリスト教指導者の卵である。この2つの寮の出身者が結婚すれば、二人で教会を守ってくれる。合同教会もうまいことを考えたものだ。そうした関係を維持促進するためには、男子寮でダンスパーティーを開き、女子寮のレディーズをお招きすることは不可欠なプログラムなのだろう。



だが、私は日本からきた留学生である。キリスト教の女子指導者の卵なんか見たこともない。「春になったらダンス」と聞いても、外は大雪だ。まだまだ先の話だと思っていたら、あと2週間となった。ルームメイトが心配して、「ケン、パートナーはいるのか?」と聞いてくれる。「誰かクラスメイトに頼むから大丈夫」と答えたが、彼女らにはそれぞれパートナーがいるし、夜大学までロングドレスを着てくるのは地理的に難しそうだ。私は車の運転がまだ出来なかった。迎えに行くすべがない。「困ったな…。ダンスの日はどこかに逃げ出そうか」と思い始めたとき、一人の美人を思い出した。関西学院の外人住宅に住んでいらしたノーマン先生のお嬢さん、ナンシーである【写真上:ノーマン家、1939年。前列中央が幼い頃のナンシー】。上ヶ原でもここでも、たまにキャンパスですれ違ふと、「ハロー」と挨拶をしてくれた。彼女のような美人は、よほど前にお願ひしていないと、デートの予約は取れないだろう。「善は急げ」だ。すぐにナンシーに電話をする。要点を紙に書いて、それを読んでのお誘いである。私の窮状を察して、OKしてくれた。これだけでもう疲れてしまった。

ベッドの上に横たわって疲れを癒しながら、夏に見た西部劇の映画の中で、騎兵隊の隊長が士官とその奥方のためにダンスパーティーを開いたシーンを思い出していた。隊長夫妻は、若い士官と幹部士官の娘さんたちのためにパーティーを開いたのである。私はその映画のシーンに加えて、ダンスの時にスカウトのインディアン青年がこともあろうに幹部士官の娘さんとパーティーに現れたシーンを想像し、そのインディアンと自分を重ね合わせていた。1957年の春のことである。人種的偏見の壁はまだ厚くて高かった。

ダンスパーティーの日がやってきた。さすがノーマン家のお嬢様である。ダンスが下手な私の気持ちと立場を察して、私がどんな勉強をし、どんな実習をしているかに話を向けて下さった。これなら、私だって多少は話ができる。そして、彼女の専攻のことを尋ねていると、寮生たちがガールフレンドと一緒にやってきて、二人の会話に割り込んできた。関学を離れて以来、初めてナンシーさんと言葉を交わしているのをぶち壊されたが、それもパーティーの一部である。その晩、私のパートナーになって下さったナンシーさんには感謝してもしきれない。それこそ「メニー・サンクス」である。

それから1ヶ月ぐらいたったある日、母から送られてきた手紙に、「関学関係の方から、貴方がノーマン先生のお嬢様とダンスに行ったことを聞きました。良かったね!」という言葉があった。まさに「子の心、親知らず」だ!

◆グレアム先生ご一家との「ギブ・アンド・テイク」

確か春学期になってからだったと思う。長らく日本で国際養子縁組のお仕事で活躍してこられたロイド・グレアム先生がトロント大学の社会福祉大学院でドクターの学生として勉強しておられることが分かった。なんと、博士の学位を取得なさったら、我が関西学院大学で教鞭をとられるということ



である。こちらから連絡を取らなくてはと思っているうちに、先生の方から電話を戴いてしまった。「日本のキリスト教関係の組織で、国際養子縁組の仕事をしておられる先生が今トロントにきているから紹介したい」ということだった。嫌も応もない。グレアム先生にお目にかかる絶好の機会である。

先生ご一家のお住まいは、私の寮からそう遠くないところのようだ。毎朝、福祉の大学院に行く道を逆の方向へ少し歩いて、2つ目の角を曲がれば先生のお宅付近である。今では、トロントの街でも有数の高級レストランや豪華なブティックが並ぶヨークヴィルという一角になってしまったが、当時は古びた、そして淋しげな住宅地といった感じだった。

ストリートと番地を書いたメモを見ながらたどり着いたお宅のドアをノックするまでもなく中からドアが開いて、日本人の男性が迎えて下さった。お名前は忘れてしまったが、グレアム先生の在日時代から一緒に国際養子縁組のお仕事をやってこられた先生だ。自己紹介をしていると、グレアム先生と奥様のエブリンさん、それに2人のお嬢様のジャネットちゃん、エドリンちゃんと、一家総出で迎えて下さった【写真左上:東京でのグレアム先生ご一家】。

お恥ずかしい話だが、私の専攻はケースワークではなく、グループワークであるから、児童福祉施設は多少見たり聞いたりしていたが、里親や里子、そして養子、それも国際的な養子縁組のことなど全く知らなかった。アジアの国から幼い子どもや赤ちゃんが不法なルートで人手に渡るのを防ぎ、受け入れ先のご両親をはじめ家族を調べ、必要な教育と準備をしたうえで養子縁組を「正規なルート」を通じて行うことがいかに重要であるかを教えられ、「なるほど」と思った次第である。思わぬところで児童福祉の勉強をさせて戴いた。

児童福祉の実習ではないが、子どもが好きな私は、すぐにジャネットとエドリンと仲良くなった。彼女らは片言以上の日本語を話せる。もっとも私の方も彼女らの日本語には及ばないが、少しは英語をしゃべれるようになりつつあった。だから、お二人と話すときには英語と日本語のチャンポンだった。私の英語の発音がおかしいと、遠慮なく直してくれた。お二人は私の「可愛い英語の先生」でもあった。

私たちが楽しく遊んでいるのをご覧になって、先生ご夫妻がお出かけのときには、私をベビーシッターに呼んで下さるようになった。お留守番の間は、私にとっては、お嬢さま二人と遊べる楽しい時間であったが、それは同時に勉強時間が少なくなるリスクを伴っていた。ご自分が博士課程に在学中のグレアム先生はそのあたりを十分に理解して下さっていて、お帰りになると、お礼の代わりに私の勉強や宿題を手伝って下さった。だから、このアルバイトは私にとってはお金以上の大きな助けになった。私は、人間のパーソナリティやその発達とか、ケースワークとグループワークといった対人援助の理論と方法は、関学の学部と大学院で十分叩きこまれてきた。しかし、福祉の理論とか組織、予算や管理といったマクロの領域のことはチンプンカンプンである。グレアム先生は、いわば福祉の家庭教師をしてくださっているようなものだ。この「ギブ・アンド・テイク」は、両者にとって大いに割の良い取引だった。

1958年夏、グレアム先生はトロントの社会福祉大学院からドクター・オブ・ソーシャルワークの博士第一号を取得なさって、社会学部教授として上ヶ原へ赴任なさった。しばしの別れと思ったが、私の留学が長引いて、実際には4年間ものお別れになってしまった。

【関西学院大学名誉教授、元理事長、元学長】

*5頁と6頁の写真はアルマン・デメストラルさん所蔵

武田先生には、「トロント大学留学記」の執筆をお願いしています（『関西学院史紀要』に掲載予定）。既にご提出いただいた中から、留学初期の部分を抜き出し、一足先にご覧いただきました。敗戦国日本からの留学生が1950年代のトロントで、どんな経験をし、何を考えたのか、**紀要の発行（2019年3月）をお楽しみに！**